

漢詩人としての阪口五峰 —「禪」に関する詩句を中心に—

田 春 娟

Abstract

This is a study of Zen poems in classical Chinese made by Sakaguchi Gohō(1859-1923), father of Sakaguchi Ango. Although Sakaguchi Gohō is known as a statesman, he was also a poet who wrote his poetry in classical Chinese. This study discusses his five Chinese poems which have "Zen" as an important factor. By paying attention to the sources of which Gohō made use, it becomes clear that what Gohō wanted to express in these poems is his longing for the unity of "Zen" and poetry.

キーワード……阪口五峰、漢詩人、逃禪、維摩居士、道人、
病禪

はじめに

阪口五峰の唯一の詩集『五峰遺稿』（大正一四・一九二四年、阪

口猷吉編輯兼発行）には、「禪」字を含む語句の出現する詩が二一首にのぼる。通覧して、その詩の題とともに語句を挙げてみると、以下のとおりである。

「逃禪」（「偶題」、二〇歳）

「病禪」（「歳暮雜感」、一二三歳）

「病禪」（「新正三日書懷」、二五歳）

「禪榻」（「題舟江嬉春圖」、二五歳）

「竹林禪」（「寄居村舍雜詠次藍川養病詩屋原韻」、二五歳）

「不在禪」（「消夏六詠用蔭山晚香韻」、二五歳）

「參禪」（「題玉峰小稿後四首 折二」、二五歳）

「禪追蘇晋」（「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」、二五歳）

「真禪」（「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」（一）、二五歳）

「問禪」（「贈立阿師」、二八歳）

「通禪」（「鬢絲禪榻小影」、三五歳）

「談禪」（「清河陳中即事」、四六歳）

他、遺墨中に一首（「通禪」、四〇歳）、また、五峰研究にとって、極めて重要な文献資料の一つである『五峰餘影』（昭和四・一九二九年、阪口猷吉編輯）にも一首（「不解禪」、年齢不詳）がある。『五峰餘影』に収録される市島謙吉による「五峰君の絶作」^{〔2〕}では、

（前略）君は幼少の頃父母の言ひつけに毎朝必ず普門品を讀めと言はれ盛に讀んだものだけれど、君は「自分は禪を解し

ない人間で父母の歿後は観音のお詣りもせず詩の佛さんばかりをお詣りしてナム賈島佛々とばかり言つてゐた」と言はれた。之にも一詩がある。

爺嬢禱子大慈前。 兒也生來不解禪。（傍点筆者）

除夕還修祭詩典。 南無島佛一年々。

父母禱子觀音大士而生予以故先子在日每朝必誦普門品蓋家世屬真宗其誦普門品異例也

と、五峰と禪との関係について言及している。

右の詩が発見された時期³は既に五峰没後のことであるし、いつ作詩されたかを確認することは容易ではない。それにしても、この詩で五峰自身は「不解禪（禪を理解しない）」と言っているが、『五峰遺稿』に使われている「禪」に関する詩を探ってみると、前掲のように「逃禪」、「病禪」、「通禪」など多彩な語句を用いた詩があり、五峰の禪に対する興味は浅くなく、実は多彩である。そこで本稿では、五峰の漢詩に出てくる「禪」に関する詩中、「逃禪」、「病禪」の二つに限定したうえで、漢詩人である五峰が「禪」を通して、如何なる境地を表現したかったのかについて分析を進めたい。具体的には、少壮期にはなかなか理解できなかった「禪」への理解が、その後の人生の積み重ねや漢学・仏教などの勉学を通して、どのような変化があったのか、何のために、「禪」への理解を求めていたのか。その禪に対峙する心境を探ってみた

いと思う。

たとえば、右に紹介した市島春城⁴が五峰詩として引用した文に見える「不解禪」と、「逃禪」を用いた上記「偶題」と題す二〇歳の作詩の間に、注目すべき「梅花丈室歌」（一九歳）という詩があり、中に「維摩居士」という語彙や、『維摩詰所説經』の内容などを散見することができるし、「虚白」、「道人」、「混沌七竅」などの道家的な言語も見出せる。文人として、仏教の経文や道教・道家的な書物を通覧するのは珍しくないかもしれないが、自作詩の中でわざわざ「維摩居士」という固有名詞や「文殊問疾」、「天女散花」、「混沌七竅」といった内容に歴々として縋い混ぜながら触れているのは、かなり特殊な事例である。このような観点から、五峰詩の「禪」に関する用語の出典の有無を、中国の古典文学に見出し比較しながら、論を起すこととする。

一、五峰詩「偶題」と杜甫詩「飲中八仙歌」にみる「逃禪」

まず、『五峰遺稿（上）』中「偶題⁵」と題する詩を取り上げる。

病來未斷酒因緣	病み來るも未だ酒の因緣を断たず
尚誦長齋繡佛篇	尚お誦す長齋繡佛の篇
明日提壺與僧醉	明日は壺を提げて僧と與に醉はん
風流蘇晋是逃禪	風流蘇晋是れ逃禪

この七言絶句の大意は以下の通りである。病にかかっても、酒との因縁を断つことができない。即ち、禁酒することができない。

心中では、依然として杜甫の「長齋繡佛」という詩篇を誦している。気持ちとしては、明日、酒壺を持って行き、和尚さんと一緒に酔って、風雅を楽しむ蘇晋のように禅の世界に逃げたいものだ。

まず、起句の「病來未斷酒因縁」を検討しよう。この詩は『五峰遺稿』の収録位置からすると、五峰二〇歳（明治十一年）のものだと推測できるが、しかし、詩中に出ている「病」に関する話題は、それまでの五峰年譜には見えない。『五峰餘影』⁽⁶⁾の「五峰・阪口仁一郎小傳」の「三、青年時代」に友人の「山際操氏談」が載り、

私は明治十年頃新潟に居ましたが、その頃五峰君は阿賀浦村から突然自分を新潟に來訪し、その後屢々往來して互に作詩の唱和を試みると言ふ間柄となりました。十一、二年頃でしたか五峰君がさう重くない病氣で一、二ヶ月新潟病院へ入院したことがありますでしたが當時自分は閑屋に住んでゐてほど遠からぬことでもあり始終訪ねては詩文の交はりをしてゐました。

此時分の社中では水落鷗水（名は璋之助、柏崎の人、當時醫學校生徒）や小林二郎、丸岡南陵（佐渡の詩人で社中の大家、折々新潟へ來ては唱和した）諸橋田龍の諸家であつたが五峰君は廿歳か廿一歳の最年少者で、しかも詩には天才あり、

すでに社中に頭角を現はしてゐました。（後略）

という証言がある。そうすると、五峰の「偶題」詩に言及されている「病」はちょうど、「偶題」詩を作ったのと同じ明治十一年、五峰があまり重くない病氣で、一、二ヶ月ぐらい新潟病院で入院し、治療を受けたことを指すのだろう。同じく年譜によると、二〇歳ごろの五峰は既に郡會議員である。その上、引用した山際操の証言から見れば、当時の五峰は政界に頭角を現したただけではなく、詩社でも才気がある若手詩人と見られていた。

この七言絶句の全体観を把握すると、最後に、「風流蘇晋是逃禪」と詠い、自分のことを蘇晋になぞらえ、蘇晋のように酔っ払い、禅の世界に逃げようと言つて、結ばれている。古人を通して、自己の理想を告白しているのが興味深い。

問題は、二句目の「尚誦長齋繡佛篇」という承句であるが、これは杜甫（七一二年〜七七〇年）の「飲中八仙歌」⁽⁷⁾を典拠としていると思われる。この二句目の真意を解釈すべく、杜甫詩と比較してみたい。文字通り「飲中八仙歌」に酒仙として登場する人物八人中、五人目の蘇晋の名が五峰詩に使われている。この蘇晋についての「飲中八仙歌」中の詩句は、

蘇晋長齋繡佛前。蘇晋は長齋す繡佛の前
醉中往往愛逃禪。醉中往往にして逃禪を愛す

となつていて、この部分から、五峰詩「偶題」の「尚誦長齋繡佛篇」「風流蘇晋是逃禪」が、「飲中八仙歌」を典拠とすることが明らかになる。つまり五峰は、病にかかつていても、酒を止めることができない自分を、「飲中八仙歌」の蘇晋になぞらえていたのである。転句である「明日提壺與僧醉」というのは、五峰の願望だろう。「長齋繡佛」といった詩文を諷んでいるうちに、蘇晋のような飲酒に憧れたのかもしれない。酒を飲む相手の「僧」が誰なのかは不明であるが、とにかく、一般に厳肅な社会的立場の僧侶を引き合いに登場させたのは、五峰のオリジナナルな作文である。そして、最後に結句では「風流蘇晋是逃禪」と、自分の飲酒をかか酒仙・蘇晋の逃禪になぞらえて詠いおさめている。

次に、五峰が意識した「逃禪」⁸⁾の語句の意味合いを掘り下げてみたい。まず、先人に遡って、『杜詩叢刊』⁹⁾に収められた「飲中八仙歌」の諸注釈の中には、「醉中往往愛逃禪」について、「禪から逃げて酒に浸る」¹⁰⁾という解釈と「酒を飲むことで禪に逃げ」¹¹⁾という両様の解釈がある。

また、五峰が師事した森春濤の子・槐南の『杜詩講義 下巻』¹²⁾には、「逃禪」について以下のような説明が書かれている。

其次は蘇晋、是は戸部侍郎と云ふ様な官に登りました人でありますけれども、平生極めて酒を愛して居つた人でありまして、世の中の蒼蠅いことは打遣つて置いて、何時でも佛前で酒を飲んで楽しんで居られたと云ふことであります。長齋と云

ふのは。佛前に居るのでありますから、肴は食べませぬ、唯だ酒ばかり飲んで居るのであります。逃禪と申しますのは、解釋が二様ありまして、或る説に據りますと、禪を逃れると云ふので、佛前で物忌みをして御座るけれども、酒を飲むから、此處ばかりは破戒をする、斯う云ふ意味であると云ふのであります。併し逃禪を破戒と云ふのは、餘程可笑な解釋でありまして、矢張り禪に逃れると云ふ方に解きまして、醉中でありながら、佛を信じて居られるものであるから、佛前に行つて、一切の世事を打ち棄て、唯だ酒を飲んで楽しんで居られる、と云ふ方が宜しいと思ひます。

この森槐南の解釈によれば、「逃禪」は禪に逃げることであり、同時に、酒に逃げることでもある。仏前に行つて、全ての俗世間のことを投げ捨てて、酒を飲んで楽しむのが、禪の境地でもあると言っているのである。これに倣い、五峰は杜甫の「逃禪」を、酒を飲んで「禪に逃げる」と解釈し、それを自らの詩に用いたと考えられる。このことは、二五歳に作詩した「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」¹³⁾と題する詩中に用いられた類似の詩句からも明らかに。その頸聯に、

禪・追蘇晋・逃于酒　　禪は　蘇晋を追いて　酒に逃げ
詩・仿長江祭以杯　　詩は　長江に仿いて　祭るに杯を以てす
(傍点筆者)

とあり、その前半は「禪については蘇晋に倣って酒に逃げよう」というのであるから、「逃禪」は禪から逃げるのではなく、酒を飲んで禪に逃げることであるのは明らかである。

では、五峰が酒を飲みつつ禪の世界に逃れ入るのは何故か。再び、五峰七言律詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」の頸聯に注目する。

禪・追蘇晋・逃于酒 禪は 蘇晋を追いて 酒に逃げ

詩・仿長江祭以杯 詩は 長江に仿いて 祭るに杯を以てす

(傍点筆者)

この対句は、蘇晋の「逃禪」と、中唐詩人・賈島¹⁴（七七九〇—八四三）長江（今の四川省）の主簿となつたところから「長江」と言う。）の「祭詩」との話借り、「禪」と「詩」との関係を語っている。先述した蘇晋「逃禪」の例は、杜甫詩「飲中八仙歌」が出典であつたことを明らかにしたが、賈島の「祭詩」の話は、『雲仙雜記』に「賈島常以歲除取一年所得詩祭以酒脯曰勞吾精神以是補之¹⁵」と記してある。すなわち、賈島は常に大晦日に自分のその年の詩を、酒と肴を以つて祭り、自分で自分を激励したものである。また、「禪」、「詩」、「賈島」に関連ある詩が五峰にはある。本論文の「はじめに」で紹介した「不解禪」についての七言絶句を振り返って見よう。

翁孃禱子大慈前。 兒也生來不解禪。

除夕還修祭詩典。 南無島佛一年々。 (傍点筆者)

「島佛」は五峰自ら「詩の佛さんばかりをお詣りしてナム賈島佛々とばかり言つてみた」と語っていることから分かるように、賈島のことを指している。五峰にとつて、賈島は詩の仏のような存在であつたと考えられる。

ここでもう一度、五峰詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」に戻り、その頸聯の大意は、「禪」は、蘇晋のように酒に逃れ入り、「詩」は、賈島のように酒を以つて祭ろうということである。すなわち、これは、同一の境地の別な表現だと思われる。要するに、五峰の「禪」は、「禪」それ自体を求めているというよりも、詩を創作できる雰囲気や境地への希求であると考えられる。

前述したように五峰の禪についての関心は、これらの詩以前から存在していたと思われる。というのは、禪とかかわりの深い『維摩詰所説經』に言及する詩句が、二〇歳以前の五峰の漢詩に早くも散見されるからである。「梅花丈室歌」と題するその詩を次に取り上げる。

二、『維摩詰所説經』¹⁶と道家と詩作―「梅花丈室歌」¹⁷

この詩は『五峰遺稿』の編集順からすると、先に触れた二〇歳

作「偶題」より早く、すなわち一九歳ごろに作詩されたと推測される。

梅花丈室歌 梅花丈室の歌

十笏之室生虚白	十笏之室虚白を生ず
靈芬直欲浄吟魄	靈芬直ちに吟魄を浄せんと欲す
四邊環植萬梅花	四辺環植す萬梅花
春來滿地暖雪積	春來りて地を満たして暖雪積る
夜月玲瓏藥珠宮	夜月玲瓏たり蕊珠宮
繁花穠蕊衆香國	繁華穠蕊衆香國
道人林下開道場	道人林下に道場を開く
左右纒祭書滿牀	左右纒祭書牀に滿つ
手持游戲一枝筆	手に持ち遊戲す一枝の筆
咳唾成珠千百章	咳唾珠を成す千百の章
有時閉門不敢出	時有て閉門して敢えて出でず
經營慘澹日抱膝	經營慘澹 日に抱膝す
混沌七竅苦鑿開	混沌の七竅鑿開に苦しむ
夢見文殊來問疾	夢に見る文殊の疾を問いに來たるを
豈知道人詩通神	豈に道人の詩の神に通ずるを知らんや
妙想彌漫六合間	妙想彌漫す六合の間
無物無事不網羅	物として事として網羅せざる無く
悉入詩中別有天	悉く詩中に入りて 別に天有り

譬諸維摩居士淨明室咫尺 諸を譬えん維摩居士が淨明室の咫尺

收容八萬由旬須彌山	八万由旬の須彌山を收容するに
道人亦存廣長舌	道人亦た廣長舌を存す
如何方門向人說	如何が方門人に向かいて説かん
興旺現出匡鼎身	興旺に現出す匡鼎の身
解頤自驚太妙絶	解頤して自ら驚く太妙絶
諸天縹縹春雲開	諸天縹縹として春雲開く
百千諸佛安在哉	百千の諸仏いづくに在らんや
香南雪北不知處	香南雪北処を知らず
髣髴散花天女來	髣髴す花を散らして天女來たるを

大意は以下の通りである。狭い部屋の中にと純白の心¹⁸が生ずる。優れたよい梅の香りは、直ちに詩歌を作る心を浄化しようとする。その部屋の周囲には、数え切れぬほどの梅の花が植えてある。春が来て地面いっぱい暖かい雪（のような梅の花びら）が積っている。夜の月が玲瓏と輝いて仙宮のようであり、沢山の花が乱れ咲いて衆香國のようである。道人は林下に道場を開いた。左右には纒祭のように寝台が書籍で一杯である。手に筆を持って遊べば、片言隻語が悉く珠玉の章句と成る。ある時、門を閉ざし、敢えて外に出ず、あれやこれやと思索をめぐらして、日々、ひざをかかえて、混沌の七竅¹⁹を彫るのに苦しむようにしていたら、夢に文殊菩薩が見舞いに來た。どうして道人の詩が神に通じ

たのか、妙想は天地四方の間に広がり、ありとあらゆる事が残らずそこに包含され、悉く詩の中に入って別天地が出現した。例えば維摩居士の狭い浄明室の中に、八万由旬⁽²⁰⁾の広大な須彌山⁽²¹⁾を収容するようなもの。道人も釈迦のように勝れた弁舌を持っていても、方便をいかに人に向かつて説くべきか。匡鼎⁽²²⁾の身が勢いよく出現し、破顔一笑その大妙絶に自ら驚く。もろもろの天上界では縹渺として春の雲が開き、大勢の仏様達はどこに居るのか。天竺の香醉山の南、大雪山の北、いたるところ、花をまきちらしながら天女がやってくるようである。

まず、はじめに本詩における仏教の『維摩詰所説經⁽²³⁾』(以下『維摩經』と呼ぶ。)の影響を記述する。五峰詩「梅花丈室歌」の語彙・構成から見れば、『維摩經』と道家思想との関わりが深い。例えば、最初の句は「十笏之室生虚白」であるが、この「十笏⁽²⁴⁾之室」というのは、維摩居士の部屋を指すのに用いられた言葉である⁽²⁵⁾。また、これと対になっている言葉「虚白」は『莊子・人間世』の「瞻彼闕者、虚室生白、吉祥止止」を出典とする。また、「夜月玲瓏藥珠宮」の「藥珠宮」は仙宮であり、「繁花穠蕊衆香國」の「衆香國」は、『維摩經』の「香積佛品第十」⁽²⁶⁾に典拠がある。

「夢見文殊來問疾」という詩句は、『維摩經』の「文殊師利問疾品第五」で、維摩の病を仏の命により、文殊が見舞う話から来ている。(爾時佛告文殊師利。汝行詣維摩詰問疾。)⁽²⁷⁾ 夢に文殊が現れたのが、維摩に文殊が現れたようだと云うのである。この後の詩句「譬諸維摩居士浄明室咫尺 収容八萬由旬須彌山」で

は、直接に「維摩居士」のことに触れている。これも『維摩經』の「不思議品第六」⁽²⁸⁾にある以下のような經文を典拠としている。

(前略) 東方度三十六恒河沙國有世界。名須彌相。其佛號須彌燈王。今現在。彼佛身長八萬四千由旬。其師子座高八萬四千由旬嚴飾第一。於是長者維摩詰。現神通力。即時彼佛遣三千由旬嚴飾第一。來入維摩詰室。(後略)⁽²⁹⁾。

上記經文のように維摩居士の十笏しかない丈室に、八万由旬の須彌山が入られた。五峰は文殊が夢に現れたのを描いた後、四句をもって、詩作の世界を描く。この「梅花丈室歌」の最後を締めくくる「香南雪北不知處 髣髴散花天女來」の詩句の中の「香南雪北」「散花天女」という言葉は、仏教と関係ある語彙である。例えば、『景德傳燈錄⁽³⁰⁾』に、「(前略) 問金粟如來爲什麼却降釋迦會裏。師曰。香山南雪山北。(後略)」とあり、「香山南雪山北」というのは、天竺の香醉山の南、大雪山の北という意味である。また、『維摩經』「觀衆生品第七」⁽³¹⁾には、以下のように天女が菩薩らの頭上に花を撒く話がある。

(前略) 時維摩詰室有一天女。見諸大人聞所說法便現其身。即以天華散諸菩薩大弟子上。華至諸菩薩即皆墮落。至大弟子便著不墮。一切弟子神力去華不能令去。爾時天女問舍利弗。何故去華。答曰。此華不如法是以去之天曰勿謂此華爲不如法。

所以者何。是華無所分別。仁者自生分別想耳。若於佛法出家有所分別爲不如法。若無所分別是則如法。觀諸菩薩華不著者。已斷一切分別想故。（後略）

これを読めば、五峰詩「梅花丈室歌」の最後の一句「髻髻散花天女來」も、『維摩經』に由来したものであることは明らかである。

五峰詩「梅花丈室歌」には、作詩に関する語句がいくつかある。まず冒頭二句目を再掲する。

十笏之室生虚白
靈芬直欲淨吟魄

「梅花丈室」である「十笏之室」にいと精神は純粹になり、「梅花」の香りは五峰の「吟魄」詩精神をただちに浄化してくれる。次の詩句に出ている「藥珠宮」や「衆香國」も、全て「梅花丈室」のことを描写している。

四邊環植萬梅花
春來滿地暖雪積
夜月玲瓏藥珠宮
繁花穠蕊衆香國

（傍点筆者）

この六句は、五峰が作詩時において求めている環境・雰囲気うかがわせる。

次の四句も詩作の心境に關係する。

道人林下開道場
左右癡祭書滿牀
手持游戲一枝筆
咳唾成珠千百章

道人とは「神仙の道を得た人」、「道家の法を修める者」、「仏法に歸依する人」、「俗世間をのがれた人」など³²を意味するが、ここでいう「道人」は、書籍を寢台の上に満たし、珠玉の名文をたくさん作っていることからすれば、主として詩人を意味していると思われる。「咳唾成珠」は『莊子』『秋水』を典拠とする言葉であり、後、文詞の優美を形容する言葉として用いられることになった。

次の二句、

有時閉門不敢出
經營慘澹日抱膝

は、詩人五峰の苦吟の有様を表現している。「經營慘澹」は、杜甫詩「丹青引 贈曹將軍霸」にある詩句で、次に、杜詩を紹介する。

詔謂將軍拂絹素 詔みことのりして將軍に謂ふ絹素を拂へと

意匠慘澹經營中 意匠いさう慘澹たり經營の中

斯須九重真龍出 斯須しよ九重真龍出づ

一洗萬古凡馬空 一洗いちせん萬古凡馬を一洗して空し

杜甫詩「丹青引」は、曹霸という將軍の人物伝記について描かれた七言古詩である。曹將軍は馬を描くのが得意であるため、ある日、玄宗皇帝は、曹將軍に玉花驄と稱す馬を写生して見よと命じた。將軍はこう描こうか、ああ描こうかと、いろいろ考え、工夫を凝らし、絹素に描いた馬はまるで九重の真龍（駿馬の意味）のように出現し、外の凡馬は一洗され、周辺はただ空しくなるばかりであった³³。

五峰の「經營慘澹日抱膝」の「經營慘澹」も、杜甫詩にある「慘澹經營」のような努力をし、詩作に尽力している様子を描いていると思われる。

五峰の詩作姿勢については、『五峰餘影』に収める山田穀城の「懐かしき第二の父」³⁴を参看したい。

（前略）其少壯時代に在つては或は席上直ちに作を成すと言つた側でもあつたらうが、其後の先生は文字が豊富になればなる程一字一句苟もせず、寧ろ遅吟、苦吟、沈吟の詩人となつた斯うして漸く出來上がつても尚ほ推敲に時日を費して定稿とする迄には容易でなかつた。多忙であつた先生は、縣内

の各地を旅行中、山村水郭を人車にゆられながら過ぐる際に、静かに途上の風光を見て詩興を動かすことが最も多いと聞いたので「然らば汽車中は如何です」と問ふた處、「いや汽車は人が混雑して詩作に適せぬ。併し徒然だから眼を閉ぢて将棋の詰手を考へてゐる」と答へられたものであつた。（後略）

右の山田の回想からは、五峰は少壯期に席上で詩を即吟することができたが、勉強を重ね、知識を蓄積すればするほど、たやすく作詩することができなくなり、苦吟するようになったと書かれているが、一九歳での作「梅花丈室歌」の「有時閉門不敢出 經營慘澹日抱膝」という詩句が事実を表しているとすれば、五峰の詩作は少壯期からすでに、「遅吟」「苦吟」「沈吟」であつたことになる。

これに続く詩句は「混沌七竅苦鑿開 夢見文殊來問疾」であり、詩作において、『莊子』の「應帝王」³⁵の中の渾沌についての挿話と維摩居士を文殊菩薩が見舞つた話に触れている。すなわち詩作の背景を道家思想と『維摩經』の世界の二つの世界が融合したものと語っているのである。注目すべきは、次の四句である。

豈知道人詩通神
妙想彌漫六合間
無物無事不網羅
悉入詩中別有天

ここに再び「道人」という言葉が使われている。「道人」の詩は神に通じ、また、その「妙想」は天地の間に広がり、その詩的世界には、あらゆる物事が網羅され、別天地が形成される。この大きなイメージは仏教的であるが、しかし、最後に用いられている「別有天」という言葉は、李白詩『山中問答』の「桃花流水窅然去、別有天地非人間。」を踏まえていることからすれば、その世界は道家・道教的な仙境を意味するものでもある。

最後の四句、

諸天縹縹春雲開

百千諸佛安在哉

香南雪北不知處

髣髴散花天女來

は、したがって、一見絢爛たる『維摩經』的イメージの世界のようであるが、実は仏教的な悟りの世界を表現しているわけではない。詩の境地を表すイメージとして結実しているのである。

このように、五峰は『維摩經』と道家・道教の語彙を用い、自らの詩作を道家の思想や維摩の悟りと重ね合わせて表現しているが、それは道家的思想自体を、また、『維摩經』的悟り自体を求めているからではない。あくまで求められているのは詩作における「妙想」であって、自らの詩の世界の中で、道家的隱逸思想と『維摩經』的悟りの融合することが求められているのである。このこ

とは以前拙稿³⁶で論じた、五峰の仙境或は隱逸の世界への憧れへと繋がっていくと思われる。

五峰詩「梅花丈室歌」では「禪」という文字は使われてはいないが、それは『維摩經』の語彙とイメージによって五峰なりの表現として結晶しているのである。五峰は杜甫詩「飲中八仙歌」の「醉中往往逃禪を愛し」て飲酒と禪を一致させた蘇晋に我が身をなぞらえ、『維摩經』をわがものとして自らの詩の世界を『維摩經』の壮大華麗なイメージを用いて描き、維摩の法を説く方便としての仮病を「病禪」と称して、自らを維摩になぞらえたのである。

三、「病禪」——五峰「歲暮雜感」³⁷、「新正三日書懷」³⁸

次に、「病禪」という言葉について考えてみたい。この言葉は『五峰遺稿』には二回使われている。最初は『五峰遺稿』上巻の「歲暮雜感」においてであり、もう一箇所は同じ上巻の「新正三日書懷」の詩中である。まず、最初に使われた「歲暮雜感」を見よう。『五峰遺稿』の編集順から推測すれば、五峰二三歳の作詩である。

綿袍恥受故人憐　綿袍　恥じて受く　故人の憐み

忍凍空齋夜不眠　凍を忍ぶ空齋　夜眠らず

散逸圖書歸故主　圖書遭盜近日皆返　散逸の図書

閨寥燈火照殘年　閨寥たる灯火　殘年を照らす

故主に帰る

誰知范叔眞寒士

誰か知らん范叔が眞の寒士なるを

自笑維摩是病禪

自ら笑う 維摩の是れ病禪なりと

戸隙續紛飛雪入

戸の隙に續紛として飛雪入る

居然身坐散花前

居然として身 散花の前に坐る

大意は以下の通りである。恥ずかしいことに綿入れの着物を友人からもらった。がらんとした部屋で寒さに耐え、夜になっても眠れない。先日、盗難に遭って散逸した図書が自分の手元に帰ってきた。物寂しく静かなともし火が残りの年を照らしている。一体、誰が范叔のことを本当に貧しい人物だと思うだろうか。これは維摩居士の病禪のようなものだと思い、自ら笑う。戸の隙間から雪が續紛と入ってくるが、安らかな気持ちで花のように散る雪の前に坐っている。

この七言律詩の起聯の前半、「綈袍恥受故人憐」に出てくる「綈袍」という語句の典故は、司馬遷の『史記』³⁹（范雎蔡澤列伝第一九）である。そこには、「（前略）以綈袍戀戀、有故人之意（後略）」と書かれている。あらましを記すと、戦国の魏の人である范雎（字叔）が先に魏の大臣・須賈に仕えた。ある時、范叔が須賈とともに、魏の使者として斉国に行った。斉の襄王が范叔の才能のことを聞いて、金銭と酒を范叔に賜った。須賈がそのことを耳にして怒り、范叔が魏を裏切ったのではないかと疑った。魏に帰国した後、須賈が斉のことを魏の相に報告すると、魏の相は怒

り、范叔に罰を加えた。范叔は魏を逃げ、秦に入って相となり、重用される。魏は范叔を死んだと思っていた。ある日、魏の使者として、須賈が秦に入り、范叔がそれを聞いて、襪褌の服を着替えて、細民の格好で須賈に会いに行った。須賈は驚き、范叔の貧しい身なりを見て、哀れに思い、自分の綈袍を范叔に与えた。この後、須賈が秦の相「張禄」に会い、「張禄」が「范叔」のことだと分かり、その場で、范叔に謝罪する。范叔は「あなたには罪が三つあるけれども、先日、旧友の情けから綈袍をくれた。それで、あなたの罪を追及しないことにする。」と言った。

五峰詩の「綈袍恥受故人憐」は、『史記』のこの記事を踏まえたものである。すなわち、范叔が宰相の身でありながら、貧寒の人に身をやつし（「范叔一寒如此哉！」）、旧友の須賈から一枚の綈袍をもらったという故事である。五峰も友人から綿入れの着物をもらって、起聯の後半「忍凍空齋夜不眠（凍を忍ぶ空齋 夜眠らず）」に描かれているように寒さを何とかしのいでいるが、本来の自分は范叔同様、単なる貧乏人ではないという気概がこの詩句にこめられているだろう。

次の前聯は、「散逸圖書歸故主 閨寥燈火照殘年（散逸の図書 故主に帰る 閨寥たる灯火 殘年を照らす）」という対句になっている。詩中の注釈が語っているように、盗難に遭った図書が先日、全部帰ってきた。詩人・文人の五峰にとつては、喜ぶべきことである。ともし火が「殘年」を照らしている。「殘年」は年末を意味し、また、人生の晩年を意味する言葉であ

るが、ここではまさに一年が尽きようとしているという意味にとるべきであろう。後聯を見よう。

誰知范叔眞寒士

自笑維摩是病禪（傍点著者）

「寒士」とは、貧しいが人格高潔である人物を指す語として使われているが、同時に雪国新潟の年末の寒さに耐えている自分を現す表現だと考えられる。

ここに、「病禪」という語句が登場する。「梅花丈室歌」で述べたように、『維摩經』では文殊菩薩が病気の維摩居士を見舞いに行くことになっているが、実は、維摩居士は本当に病気になるわけではない。『維摩經』ではこのことを、「其れは方便を以つて身に病あるを現す」（「方便品」第二）と書いている。それは法を解くための方便であり、維摩は見舞いに来た客に法を説いたのである。「病禪」とは、あまり用いられた例のない言葉であり、五峰の造語かと思われるが、病を方便とした維摩の禪を指すのであろう。自らを、なかば冗談のように、維摩居士の「病禪」になぞらえているのである。

五峰は一八歳の時に、すでに地租改正のため、奔走し、また、二〇歳の年に、すでに郡会の議員になり、さらに、明治一二年即ち五峰二一歳の時に、新潟米商会所（今の米穀取引所前身）頭取の代理となっている⁴⁰。社会人になったばかりの五峰が、実際に

仏門に入るわけにはいかないだろう。その気持ちがあるとしても、実現できないわけである。

戸隙繽紛飛雪入

居然身坐散花前

これはこの七言律詩の結聯である。右記の雪国の話とともに見れば、雪が戸の隙間から舞い入り、乱れ落ちて来た風景を描いている。吹雪さながらの世界を読者の目の前に展開しているだろう。結聯の後半では、「散花」という言葉が使われている。雪の乱れ入る情景を比喩的に描いていると考えられるが、前述した五峰詩「梅花丈室歌」の最後の一句である「髣髴散花天女來」をも連想させ、さらに『維摩經』の「散花天女」まで連想させるだろう。天女から撒いた花のように降り注ぐ雪の中、じつと坐っている身は禅僧の座禅中の姿のようにも見える。体を動かさず心も動かさず安らかに静かにずっと座り込む五峰の年末心境が、このイメージによって表されていると考えられる。

次に「病禪」という語句が出てくる詩は、「新正三日書懷⁴¹」である。

新正三日書懷 新正三日 懷を書す

淑氣先通鳥語邊 淑氣先通鳥語邊

辛盤接上誕辰筵 辛盤 接上す誕辰の筵

開春蕩蕩第三日 開春蕩蕩たり第三日

落地匆匆廿五年 落地匆匆たり二五年

慧業竟應從謝後 慧業は竟に謝の後に従ふべく

才名肯道愧盧前 才名は肯て盧の前にあるを愧ずと道は

ん

蕭然丈室梅花下 蕭然たる丈室 梅花の下

笑署頭銜是病禪 笑ひて署す頭銜是れ病禪

大意は、和やかな新春の雰囲気先ず鳥の鳴き声のあたりに感じられる。五辛盤⁴²が私の誕生日の宴に次々と出てくる。新春のゆつたりしたこの三日に私はこの世に生まれ出て、以来、あわただしく二五年を過ごしてきた。慧業はやはり謝（靈運）には及ばず、才名は盧（照鄰）の前にあることを愧じなければならない。物寂しい狭い居室は梅の花の下にあり、若し仮に、署名をしなければならぬとすれば、笑って、「病禪」と記すのである。

つまり「新正三日書懷」詩には、「淑氣先通鳥語邊 辛盤接上誕辰筵」と始まり、和やかな誕生日の宴の様子が目の前に展開されている。頷聯の「開春蕩蕩第三日 落地匆匆廿五年」という対句をなす点からすれば、この詩は五峰の二五歳の七言律詩だと推定できる。事実、五峰年表によると、誕生日は一月三日であり、この詩は誕生日にちなんで作られたものである。新春の穏やかな三日目に生まれてから、あわただしく二五年の年月が経ってしまったという誕生日における感慨が表されている。

本詩の中で最初に注目したい言葉は、頷聯の冒頭の「慧業竟應從謝後 才名肯道愧盧前」という対句に登場する「慧業」である。この語句の典故は、『宋書⁴³』の以下の叙述である。

太守孟顓事佛精懇、而為靈運所輕、嘗謂顓曰…「得道應須慧業文人、生天當在靈運前、成佛必在靈運後。」顓深恨此言。

大意は以下の通りである。太守である孟顓は仏教に仕えるのが大変熱心なものの、（謝）靈運には軽視されていた。ある時（謝靈運が）孟顓に「悟りを会得するにはまさに教理に通じた文人であるべきだ。あなたが天に生まれたのはまさに靈運より前のことだったが、仏となるのはきつと私の後になるだろう。」と言った。顓はこの言葉を深く憎んだ。

「慧業」という言葉は、本来仏の知恵に裏付けられた行為を、さらには仏教の教理に通じていることを意味する。そう考えると、頷聯の前半である「慧業竟應從謝後（慧業は竟に謝の後に従ふべく）」というのは、自分の仏教についての知識はついに謝靈運に及ばないだろうという意味になる。しかし、頷聯の後半「才名肯道愧盧前（才名は肯て盧の前にあるを愧ずと道はん）」ということからすれば、「慧業」は、単に文業のことを言っているように見える。次に、「盧前」という言葉であるが、これについては、『舊唐書

〔44〕に左のような記述が見える。

烟與王勃、盧照鄰、駱賓王以文詞齊名、海內稱為王楊盧駱、亦號為「四傑」。烟聞之、謂人曰：「吾愧在盧前、恥居王後。」

楊炯は王勃、盧照鄰、駱賓王とともに文章や詞などで名を馳せていたが、世評は「王、楊、盧、駱」の順番で呼んでいた。楊炯がそれを聞いて、人に「私は盧（照鄰）の前に自分が位置づけられることを恥ずかしく思い、一方、王（勃）のような人物の後に自分が位置づけられるのも恥ずかしい。」と嘆いた、ということである。

この記述からすれば、前半の「慧業竟應從謝後」の「慧業」も、文業についてのことを比喩的に述べているのではないかと思われる。「梅花丈室歌」においても、自らを維摩に喩え、「道人」と称しながらも、仏教のことを述べているのではなく、詩作のことを言っていたことが参考になろう。五峰が「新正三日書懷」において、自らを、智恵は無論、「謝」の後に従い、詩才が「盧」の前に出ることを恥じると述べたのは、先人に対する尊敬の気持ちと自分の作詩才能に対する謙遜の気持ちとが表現されたと見てよい。同時に、二五歳になったばかりの人物の言葉としてみれば、相対的な自尊心と自尊心の高さを感じられる。五峰の漢詩は、二一歳の時、明治詩壇を一新した森春濤の「新文詩」に初めて掲載された。当時「新文詩」といえば、唯一無二の漢詩雑誌だった⁴⁵。さらに二五歳の時には、清人・王治本（一八三五〜一九〇七）の詩

集『舟江雜詩』を編輯し、注をつけて出版した。清末の在日文人の中でも、三〇年間という滞在期間最長の人物である⁴⁶。王の著作は極めて少なく、この『舟江雜詩』は、王にとっては唯一の刊行資料になる。三〇年間にわたる、詩の評点や詩集の序や題詞・題詩などが、大量に残されたにもかかわらず、唯一の詩集が五峰の手で出版されたのは、ただの偶然ではないと考えられる。この業績に対して五峰の抱いた自尊心と自尊心は、想像に難くない。詩の頸聯からうかがわれるのは、このような五峰の青年期の客気である。

最後に、注目したいのは、「丈室梅花」という言葉である。「新正三日書懷」の尾聯は、

蕭然丈室梅花下
笑署頭銜是病禪

となっていて、その前半に、「丈室梅花」という言葉が出てくる。この「丈室梅花」という言葉は、先述した五峰の「梅花丈室歌」と題する別詩を連想させるだろう。その「梅花丈室歌」には、『維摩經』の「衆香國」や「文殊問疾」や「八萬由旬彌彌山」や「天女散花」などの仏語が用いられ、五峰の『維摩經』に対する関心の深さを表すとともに、五峰の部屋が維摩の「丈室」になぞらえられていた。この尾聯の後半に、「歲暮雜感」で用いられていた「病禪」という言葉が再び登場する。「笑ひて署す頭銜是れ病禪」。「歲

暮雜感」では「病禪」は維摩の方便としての病という意味で用いられていたが、基本的には同じ意味で用いられていると考えてよいであろう。「頭銜」は一般に官職名を言うが、ここでは自称というくらいの意味であろう。冗談半分に自らを、「病禪」すなわち仮病を使って道を説いた維摩に擬しているのである。「歳暮雜感」の「自笑維摩是病禪」（自ら笑う 維摩の是れ病禪）という詩句と、それから一年余りがたった二五歳の誕生日の「笑署頭銜是病禪」（笑ひて署す頭銜是れ病禪）という詩句は、句の構造自体類似しているが、自らを病を方便として禪を説く維摩になぞらえるという内容自体は変化していない。「病禪」とは言うものの、仏教の教理や悟りを意味しているのではなく、「梅花丈室歌」の用例と同様、詩の境地を表現しているものと考えられる。

結びにかえて

本論では、五峰の「逃禪」、「病禪」という語句が出てくる漢詩四首と、維摩と関係する「梅花丈室歌」に注目し、典拠などを通じて、五峰の詩と禪仏教の関係を分析した。

日本には「詩禪一味」という表現があるが、同様のことが宋の嚴羽（約一一九二～一二四三）『滄浪詩話』（47）「詩辨」では、

（前略）大抵禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟。（中略）然悟有淺深、有分限、有透徹之悟、有但得一知半解之悟。（後略）（48）

と述べられている。嚴羽の作詩に対する理論では、參禪と作詩の目指す境地は同じであるということになる。仮に五峰が『滄浪詩話』にある「禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟。」という禪と詩の共通性の話を読んだことがあるとしたら、これが五峰の仏教・禪・維摩經』に対する探究の理由になったのではないか。五峰が杜甫詩「飲中八仙歌」の「逃禪」に注目した訳も、維摩の「病禪」を語った理由もここにあるに違いない。五峰は『滄浪詩話』にあるような、禪の「妙悟」と詩の「妙悟」が一致する境地を求めているのである。

最初に述べたように、五峰の詩にはこのほかに様々な禪についての言及がなされているが、紙幅の都合で、本稿ではそのすべてを論ずることはできなかった。これらについては、また別な場を借りて論じ、五峰の漢詩人としての「禪」に対する態度の全体像に迫ってゆきたい。

〈注〉

- (1) 『五峰遺稿』上巻に収録されている詩であるが、「禪」字の表現は違うが、タイトルは前の詩と同じである。つまり、同じ題目で作詩したのである。
- (2) 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社、昭和四年一月三日 一八〇～一八一頁。
- (3) 前掲『五峰餘影』一七九頁。
- (4) 市島謙吉の号である。
- (5) 坂口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿（上）』日清印刷株式会社、大正一四年一〇月一五日 五丁才。
- (6) 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社、昭和四年一月三日、二四頁。

- (7) 『全唐詩』中華書局 一九六〇年四月 第四冊 卷二二六 二二五九〜二二六〇頁。
- (8) 諸橋徹次『大漢和辞典』修訂第二版 卷一一 大修館書店 平成一年一月二〇日 四〇〜四二頁 ①禪にのがれる。浮世を脱出して禪に入る。僧侶の生活をする。②禪をのがれる。酒をのんで、佛戒にそむき離れる。③禪のこと。
- (9) 黄永武博士主編『杜詩叢刊』台湾大通書局印行、一九七四年一月。
- (10) 『杜詩叢刊』の『杜詩詳註』清 仇兆鰲輯註 文史哲出版社 二二二頁（前略）持齋而仍好飲、晋非真禪、直逃禪耳。逃禪猶云逃墨逃楊是逃而非逃而入（後略）。
- (11) 『杜詩叢刊』の『分門集註杜工部詩（二）』宋、闕名集註 上海涵芬樓借南海潘氏藏宋刊本 七六五頁。
- 『杜詩叢刊』の『刻杜少陵先生詩分類集註（五）』明、邵寶集註 明、萬曆廿三年吳周子文刊本 二〇四六頁。
- 『杜詩叢刊』の『集千家註分類杜工部詩（二）』宋、徐居仁編 黃鶴補註 九七〇頁。
- 『杜詩叢刊』の『唐李杜詩集（三）』明、邵勳編 明、嘉靖二十一年無錫知縣萬氏刊本 台湾大通書局印行 八二九頁。
- 『杜詩叢刊』の『纂註杜詩澤風堂批解（一）』朝鮮、李植批解 清、康熙十八年朝鮮李氏家刊本 一一九頁。
- 『杜詩叢刊』の『草堂詩箋（千家注杜詩）（上）』宋、魯豈編次 宋、蔡夢弼會箋 廣文書局印行、一九七一年九月 四〇頁。
- 『杜詩叢刊』の『欽定四庫全書 九家集註杜詩（二）』一〇九頁。
- (12) 森槐南『杜詩講義』下卷』文會堂書店 大正元年一月 六一三〜六一四頁。
- (13) 坂口歌吉編輯兼發行『五峰遺稿（上）』日清印刷株式會社、大正一年一月二五日一五丁オウ。
- 「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」
- | | |
|---------|---------------------|
| 百年賤辱老蒿萊 | 百年 辱賤 老い蒿萊 |
| 面目唯能保本來 | 面目 唯能く本來を保つ |
| 舉世驚猜真怪物 | 舉世 驚猜 真怪物 |
| 受人憐惜豈奇才 | 人に受けること 憐惜 豈 奇才ならんや |
| 禪追蘇晋逃于酒 | 禪 蘇晋を追い 祭に逃げる |
| 詩仿長江祭以杯 | 詩 長江に仿い 祭るに杯を以てす |
| 債鬼滿前齊叩首 | 債鬼 前に滿ち齊に叩首す |
| 先生笑坐亂書堆 | 先生 笑ひ坐つて乱書堆し |
- (14) 賈島は「僧推月下門」の句を得たが、「推」を改めて「敲」にしようかと迷つて韓愈に問い、「敲」の字に決めたという故事で有名。
- (15) 唐 馮贇撰『雲仙雜記』（四部叢刊統編子部）卷四 「祭詩以酒脯」上海書店、一九八四年二月。
- (16) 高楠順次郎編『大正新脩大藏經』普及版 第一四卷『維摩詰所說經』姚秦三藏鳩摩羅什譯 大正新脩大藏經刊行會 一九八八年〜一九八九年。
- (17) 坂口歌吉編輯兼發行『五峰遺稿（上）』日清印刷株式會社、大正一年一月二五日 四丁ウ〜五丁オ。
- (18) 心が無念無想であれば、自ら真理に到達することが出来るという喩え。
- (19) 『莊子』「應帝王」に「南海之帝爲儵、北海之帝爲忽、中央之帝爲渾沌、儵與忽、時相與遇於渾沌之地、渾沌待之甚善、儵與忽謀報渾沌之德、曰、人皆有七竅、以視聽食息、此獨無有、嘗試鑿之、日鑿一竅、七日而混沌死。」
- (20) 由旬とは、古代インドの距離測定単位である。一由旬は七マイルまたは九マイルとする。
- (21) 仏教の世界説で、世界の中心にそびえ立つという高山。海中にあり、高さは八万由旬。
- (22) 人名、匡衡のこと。匡衡は前漢の政治家、生没年不詳。『漢書』（卷八一）張孔馬傳第五一に「無説『詩』、匡鼎來。匡説『詩』、解人頤。」という叙述がある。「匡衡鑿壁」の話で有名。
- (23) 大乘仏教經典の一つで、サンスクリット本、チベット語訳と3種の漢訳支謙訳、鳩摩羅什訳、玄奘訳が現存する。一般に用いられるのは鳩摩羅什訳『維摩詰所說經』である。内容は明らかに般若經典群の流れを引いているが、大きく違う点は、一般に般若經典は呪術的な面が強く経自体を受持し説誦することの功德を説くが、維摩経ではそういう面が希薄である。中インド、バイシャーリーの長者ヴィマラキールテイ（維摩詰、維摩、浄名）が病氣になったので、釈迦が菩薩や弟子達に見舞いを命じるが、以前に維摩にやりこめられているため、誰も理由を述べて行くこととしない。そこで、文殊菩薩が見舞いに行き、維摩と対等に問答を行い、最後に維摩は究極の境地を批判し、在家者の立場から大乘の空の思想を高揚した初期大乘仏典の傑作である。作者の立場本で広く親しまれ、聖徳太子の三経義疏の一つ『維摩経義疏』を始め、注釈も多い。

- (24) 十笏とは笏を十箇容れる程の広さを意味する。笏は束帯の時、帯に挿すもの。
- (25) (宋)重顯頌古 克勤評唱『佛果圓悟禪師碧巖録』(大正新脩大藏經)「維摩示疾於毘耶離城也。唐時王玄策使西域過其居。遂以手板縱橫量其室得十笏。因名方丈。」二二〇頁。
- (26) 『維摩詰所說經』卷下 姚秦三藏鳩摩羅什譯 香積佛品第十 五五二頁 (前略) 有國名衆香。佛號香積。今現在。其國香氣比於十方諸佛世界人天之香最爲第一。彼土無有聲聞辟支佛名。唯有清淨大菩薩衆。佛爲說法。其界一切皆以香作樓閣。經行香地苑園皆香。其食香氣周流十方無量世界。(後略)。
- (前略) 衆香という国がある。その仏は香積と号し、いまも現にまします。その国の香氣は十方の諸仏の世界における人間や天人どもの香に比べてみても、最もすぐれ第一のものである。その国土には、教えを聞くのみの修行僧や、ひとりできとりを開く修行者がいるとは聞いていない。ただ清らかな大菩薩のかたがたのみがおられ、仏はかれらのために法を説きたもう。その世界の一切のものどもは、みな香をもって楼閣を作り、香りよりなる地をそぞろ歩きし、庭園もみな香ばしい。その食物の香氣は十方の無量の世界にあまねく流れている。(後略) 中村元訳者代表『世界古典文学全集 第七卷 仏典Ⅱ』筑摩書房、昭和四〇年七月 四四頁を参考にする。
- (27) 『維摩詰所說經』卷中 姚秦三藏鳩摩羅什譯 文殊師利問疾品第五 五四四頁 その時、仏が文殊菩薩に告げられたもうた、「あなたが維摩詰のところへ疾の様子を問い、見舞いに行ってもらいいますか。中村元訳者代表『世界古典文学全集 第七卷 仏典Ⅱ』筑摩書房、昭和四〇年七月 二四四頁を参考にする。
- (28) 『維摩詰所說經』卷中 姚秦三藏鳩摩羅什譯 不思議品第六 五四六頁。
- (29) 中村元訳者代表『世界古典文学全集 第七卷 仏典Ⅱ』筑摩書房、昭和四〇年七月 二九〇頁を参考にする。(前略) ここから東の方に、ガンジス河の砂の数の三十六倍もあるほど多くの国をすぎたところ、須弥相という名の世界があります。その仏を須弥燈王と号し、今も現にまします。かの仏の身体はだけが八万四千ヨージヤナあり、その獅子座の高さは八万四千ヨージヤナあり、美しく飾られていて、第一です。と(文殊は答えた)そこで長者、維摩が神通力を現じたところが、即時にかの仏は、高く広く美しく飾られ浄らかな三万二千の獅子座を送って来て、維摩の室に入らせたもうた。(後略)。

- (30) (宋) 釋道原撰『景德傳燈録』(大正新脩大藏經)三九〇頁。
- (31) 『維摩詰所說經』卷中 姚秦三藏鳩摩羅什譯 觀衆生品第七 五四七頁(五四八頁) (前略) そのとき維摩の室にひとりの天女がいた。もろもろの立派な人々を見て、説かれた法を聞いて、その身を現じ、天の華をもろもろの菩薩・大弟子たちの上に散じた。これらの華が、もろもろの菩薩のところに至ると、すぐに皆落ちてしまった。ところが、それらの華が大弟子たちのところに至ると、かれらに著いて、落ちなかつた。一切の大弟子たちが神通力によって華をとり去ろうとしたけれども、とり去ることができなかつた。そのとき天女はシャーリプトラに問うた、「どうして華をとり去ろうとなさるのですか。」シャーリプトラは答えた、「これらの華は、修行僧にはふさわしくないものです。だから、これをとり去ろうとするのです。」天女は言った、「これらの華を、修行僧にふさわしくない」とお考えになつてはいけません。なぜかと申しますと、これらの華は分別するはたらきがないのです。ところがあなたが自分で分別の想を生じておられるだけです。もしも仏法において出家したのに、しかも分別するところがあるならば、それこそ「修行僧にふさわしくない」ことなのです。もしも分別するはたらきがなければ、それはすなわち「ふさわしい」ことなのです。もろもろの菩薩がたをみますに、華がつかないのは、すでに一切の分別の想を断じておられるからです。」(後略) 中村元訳者代表『世界古典文学全集 第七卷 仏典Ⅱ』筑摩書房、昭和四〇年七月 三三三三四頁。
- (32) 『漢語大詞典』繁体版 聯合出版集團 二〇〇二年 「道人」の項目に以下のように解釈してある。「1、有極高道德的人。2、煉丹服藥、修道求仙之士。3、道教徒道士。4、佛教徒、和尚。5、佛寺中打雜的人。」
- (33) 森槐南『杜詩講義 下卷』文會堂書店 大正元年一月 八七一頁を参考にする。
- (34) 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社、昭和四年一月三日 二六六〜二六七頁。
- (35) 『莊子』「應帝王」に「南海之帝爲儵、北海之帝爲忽、中央之帝爲渾沌、儵與忽、時相與遇於渾沌之地、渾沌待之甚善、儵與忽謀報渾沌之德、曰、人皆有七竅、以視聽食息、此獨無有、嘗試鑿之、日鑿一竅、七日而渾沌死。」
- (36) 拙稿「漢詩人としての阪口五峰——竹を題材とした詩について——」『現代社会文化研究』第五十二号 二〇一一年一月 (15) 頁。

- (37) 前掲『五峰遺稿』(上) 九丁才。
- (38) 坂口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿(上)』日清印刷株式会社、大正一四年一〇月二五日 一二丁才。
- (39) (漢) 司馬遷撰(宋) 裴駰集解(唐) 司馬貞索隱(唐) 張守節正義『史記』卷七九 范睢蔡澤列伝第一九 中華書局 一九八二年一月二四〇一〜二四一四頁。
- (40) 前掲『五峰餘影』二二〜二三頁。
- (41) 坂口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿(上)』日清印刷株式会社、大正一四年一〇月二五日 一二丁才。
- (42) 大皿・五種の辛物を盤に盛ったもの。元日に之を食べば、五腦の氣を通じ、健康を保つという。五辛菜のこと。
- (43) (梁) 沈約撰 楊家駱主編『宋書』卷六七 列傳第二七／謝靈運 荀雍 羊璿之 何長瑜／山居賦 一七七五〜一七七六頁 又、(唐) 李延壽撰 楊家駱主編『南史』卷一九 列傳第九／謝靈運 何長瑜 孟顥 孫超宗 曾孫才卿 幾卿 五四〇頁には同じ叙述がある。「太守孟顥事佛精懇、而為靈運所輕、嘗謂顥曰：「得道應須慧業、丈人生天當在靈運前、成佛必在靈運後。」顥深恨此言。」
- (44) (後晋) 劉昫撰 楊家駱主編『舊唐書』卷一九〇上 列傳第一四〇上／文苑上／楊炯 五〇〇三頁。
- (45) 前掲『五峰餘影』二六頁。
- (46) 王宝平主編『中日詩文交流集』上海古籍出版社 二〇〇四年一〇月四〜五頁。
- (47) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2590380> 市野沢寅雄 『滄浪詩話』明德出版社、一九七六年七月 二一〜二五頁 郭紹虞校釋『滄浪詩話校釋』人民文学出版社、一九六一年五月 一二頁を参考にする。
- (48) 書き下し(前略) 大抵禪道は惟だ妙悟にあり、詩の道も亦妙悟にあり。(中略) 然れども悟浅深あり、分限あり。透徹の悟あり、但一知半解の悟を得るあり。(後略)。

主指導教員(佐々木充教授)、副指導教員(廣部俊也准教授・岡村浩准教授)